西鶴：哥仙大坂俳諧師から大坂歳旦まで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1985-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1588

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

西鶴

――哥仙大坂俳諧師から大坂歳旦まで――

江本　裕

はじめに

筆者は先に、西鶴の処女編著『生玉万句』について考えたが（松尾靖秋氏古稀記念論集『近世文学論攷―研究と資料』所収「生玉万句考」）、今稿はそれを継ぐものである。いま簡単に先稿を要約すれば、寛文十三年（一六七三）興行、出版の『生玉万句』は、句数三〇三（追加の三句を含む。なおすべてが発句から第三までを収めるので厳密には「句」と称せぬかもしれぬが、便宜的にかく呼ぶ）、これに興行を祝賀する発句五十三から成り、出句者は前者が一六一名（荒木田守武を例外として除けば一六〇名）、後者が四十五名（八名は上記出句者と重なる）だった。そして右のうち、『生玉万句』（以下書名は適宜略称する）以前の撰集等に名を認め得る者が興行出句者では六十七名、手がかりを得ぬ者八十五名、判別不能の者九名、祝賀発句の場合は認め得る者十四名、認められぬ者三十一名。また、前者の認め得ぬ者八十五名のうち、『生玉』以後の西鶴編の撰集等に顔を出す者が三十九名（うち広瀬一歩は判別不能から）、従ってなお確認できぬ者は四十七名となり、後者では三十一名中四名を除く二十七名が未確認という結果だった。[注(1)]

この結果は、俳諧に疎い筆者の処理だから訂正を要しようが、大幅に変るとは思われず、とすれば『生玉』に参加した俳人の過半は、二流以下または無名の俳人だったと、一応は評することができる。しかし、『生玉』以前に顔を出す六十

七名をなお詳しく見ると、大阪・堺近辺を中心とする、『鷹筑波』（寛永十九年〈一六四二〉）以後万治（一六六〇）以前に名を連ねる俳壇の動向に比較的関係の薄い長老また遊俳的俳人と（北峯正甫・西田久任・隅田路春・尼坂好道・堺一円・生松勝政・土橋宗静・河内玖生且保・同吉村種好等）、寛文、特に寛文六年（一六六六）刊の『遠近草』前後から活動を始める（あるいは著しくなる）牧野一得・高木松意・山口清勝・中堀幾音・同初知・前川由平等の新人群に分れ、後者が主導権を握っていたこと、そのことがこの新人群の中で唯一撰集（『蛙井集』）を持つ山口清勝に巻頭第三の地位を与えていること、そして彼等新人群の多くが以後の西鶴の俳諧活動に深くかかわっていること、かつ『生玉』以前に名を認め得ぬ無名俳人からも、和気遠舟・早川西随・志水正察・大須賀胤久等の、やはり彼の以後の活動に深くかかわる者が多いことなどをあげ、『生玉万句』が俳諧師西鶴にとって重要な意味を持つことを強調した。

泉州・河内辺の隠居的・旦那芸的俳人の案外多く認められることに関しては、師宗因はむろんのこと、追加の第三をつとめた南方由の存在に注意すべきだとも言い添えた。[注(2)] としても、宗因・方由の援けがどの程度だったのか、阿蘭陀流とさみされ万句興行から排除された一派の結集にどの程度の費用を要し誰が出したのかなど問題は依然として残り、また仁和寺利玄（出句数5）・同有年（4）・古道（4）・高家（3、上記の内『生玉』以前に名を認める者は利玄・有年のみ、以後の西鶴系俳書に名を出すのは利玄〈『点滴集』1句〉有年〈『物種集』『二葉集』各1〉のみ）、摂州古妻住栄治（出句数3）・正重（2）・正直（1、上記の内栄治・正重は『貝殻集』に24・25句等堺関係の俳書に顔を出すが正直は認められず、以後の西鶴系俳書には全く出ず）に見られるように、若干の技ある者が一統を引き連れては出たがその後は殆ど因まないなど、言い及ばなかった部分もあるのだがそれらは一応措き、今回は『大坂歳旦』までを少し考えてみたい。なお今稿も、「貞門談林俳人大観」（「近世文芸資料と考証」一～十、昭和37～53）、種茂勉氏「大阪談林俳壇の研究」一―四（浜松市立高等学校研究紀要、昭和41～44）、乾裕幸氏『俳諧師西鶴』（前田書店、昭和54）等から多くの学恩を蒙っていることを銘記する。

一　哥仙（大坂俳諧師）　―その一―

所謂通行の『哥仙（大坂俳諧師）』は、延宝元年陽月（十月）中澣の序を持ち、野間光辰氏によって紹介された、その初撰本と考えられる『俳諧歌仙画図』は、寛文十三年九月十日／洛葉之住／雲愛子」の序を持つ。寛文十三年は九月二十一日に改元して延宝となのるのだから、この間約一か月。そして『生玉万句』の興行は同年春（または六月）[注(3)]だから、西鶴はその直後から、新人であるにかかわらず大胆にも、大阪俳壇を歌仙化する志を抱いたことになる。既に野間氏の詳細な考察が備わり学恩を蒙る処大なのだが[注(4)]、『生玉』の成就を念頭に若干考えてみる。

まず『画図』と『哥仙』両序の大幅な相違、次に撰入された俳人の変動と座順の移動が問題となる。

ひな人のひなにはあらで、雲井の都路までその名ひろく聞えあげたるはいかいの歌人、その数しらず、中にも大坂のすき人世にかくれなきを選て、哥仙の画図にちりばめ、みぬよの友とせんとばかり

干時寛文十三年（癸丑）九月中旬　　洛葉之住／雲愛子

（『俳諧歌仙画図』序〈野間氏前掲稿より〉、句読点・濁点は私に付す。次も同じ）

肱を枕とし踏反ておもふに、神風穏に四海波なくて、花の朝月の夕の俳諧諷（コンフウ）之（タ）験（ヒコレヲ）之（ヒ）は本邦の習俗也。されども、誹佗立（タフシリガ）我（ワ）詩事（タテナアラソフコト）、恰如有（アタカモ）牙（キバ）犬有（アルイヌ）爪（ツメ）鶏（ニワトリノ）而分（コトクニ）がたし（ツチヲカチ）。誠や衆愚諤々たるは一賢之唯唯々たるにはしかじと、或老翁に尋捜て、達（ハイカイノ）干（ウタニ）俳諧之歌人（タツシタルヒト）選て、画図にちりばめ、見ぬよの友とせんばかり

皆延宝元年歳次（癸丑）冬陽月中澣

西鶴

（『哥仙大坂俳諧師』序〈定本西鶴全集十所収による〉、誤刻は改め、傍訓は頭注による）

あえて双方全文を出したが、前述のごとく『画図』に「洛葉之住／雲愛子」なる署名があるのに対し、『哥仙』は無署名である。かくて前者は「陽」を「葉」と誤る。単なるケアレスミスと言えるかどうか。「落葉」を介しての作為が感じられないだろうか。次に序文の内容であるが、野間氏指摘のごとく、前者が京都を意識（容認）しているのに対し後者は自立的である。「ひな人のひなにはあらで」は田舎人にも田舎臭くない人はいての意だろうし、そういう人には「雲井の都路」まで名の通る人が数多くいる。そして「中にも大坂のすき人」とくるのだから、「大坂」は「ひな」に属し、その中で都にも聞えたる三十六人を選んだということになる。つまりは「貞門全盛の都の俳壇の権威を容認」（野間氏）した上で、彼等にも認められている大阪俳人三十六人を選んだと言うのである。しかもその序には作為（あるいは軽率無学）とも受けとられかねない「洛葉」と記し、余り耳にしない「雲愛子」なる号が署名されていた。

一方、『哥仙』の方は、俳諧の隆盛をまず謳い、しかしそれが他を譏り我を立てる、喧噪に終始している現状に及び、それよりは一賢の唯々、おのれに同調してくれる達人を選んだと言うのだから、編纂意識が明確である。「大坂のすき人」の「大坂」は出さず書名に譲った。わずか一か月の間にどうしてこう変ったのか。それは暫く措いて表(1)を御覧いただきたい。『哥仙大坂俳諧師』（上段）と『俳諧歌仙画図』（下段）との座順対照である。始めに加除を記すと、×印（下段）の可玖・初知・春倫・保俊・西柳の五名が『哥仙』で除かれ、これに代り◎印（上段）の、遠舟・貞因・路春・宗久・栄春・清勝の六名が新たに加えられた。

除かれた五名のうち、西村可玖は初号重親、長愛子、吉竹とも号し（乾裕幸氏『俳諧師西鶴』）、西鶴句現在初出の『遠近集』（寛文六年刊）の撰者（長愛子・吉竹）。万治三年刊の『慕紫集』（重親）から名が見え（乾氏上記書）、『都草』（寛文五年刊）以下に入集が多いゆえそう古いとは言えぬが相応の俳歴を持ち（表(2)参照）、西鶴の亡妻追善『独吟一日千句』（延宝三年刊）巻末に載る追善発句では西山梅翁・松山玖也・梶山保友に続いて第四位、翌年の『大坂歳旦』でも玖也・保友・

表(1)『哥仙』・『画図』対照表

座順	哥仙大成	俳諧歌仙画図
一	九昌院 空存	空存
	西山西翁	西翁
二	松山玖也	玖也
	梶山保友	保友
三	伊勢村意朔	意朔
	喜多村立以	立以
四	北峯正甫	正甫
	△井原鷺永	△無睦
五	片山秋月	△重安
	△川崎方女	△行風
六	◎和気遠舟	△休安
	△牧野一得	△以仙
七	△西田久任	×可玖
	△藤田不琢	△如貞
八	白江酔鶯	△宗信
	△前川由平	方女
九	岡田悦春	忠由
	△中林素玄	悦春
十	谷忠由	松意
	◎藤原貞因	×初知
十一	高木松意	久任
	◎隅田路春	一得
十二	◎八木宗久	×春倫
	◎井岡栄春	×保俊
十三	高滝以仙	幾音
	中堀幾音	素玄
十四	井口如貞	×西柳
	◎山口清勝	(由平)
十五	広岡宗信	?
	生白庵行風	鷺永
十六	蔭山休安	酔鶯
	蔭山無睦	不琢
十七	伊勢村重安	△秋月
	半井一六	一六
十八	夕陽庵道寸	道寸
	津田休甫	(休甫)

注（　）内は野間氏の推定。なお、定本西鶴全集所収本は十六右以下が一六→道寸→無睦→重安→休甫となっていて座順異なるが（稀書覆製会本も同じ）、東大酒竹文庫本と対照しつつ、野間氏稿が示す座順に従う。

伊勢村意朔についで四位を占めているので、決して軽い存在でもなく西鶴とも疎くはなかったと思われる。中堀初知も同様で『生玉』に二句出句、初出は『烏帽子箱』（寛文元年刊）と思われるので可玖とほぼ同時期、以後の活動も活発で（表(2)参照）、西鶴との関係も薄くはない（表(3)参照）。この二人がなぜ外されたのか解せぬ処多いが、これを除くには、新しく加える者との比重関係で余程の事情があったと考えねばならぬだろう。初知の場合は、より西鶴と密接で『哥仙』にも

入る、弟幾音とのかかわりがあるかもしれない。

残る三人のうち春倫と保俊は俳歴もあり活動も活発のようだが（春倫の方が古い→表(2)）、管見の範囲、西鶴との関係に限れば春倫は『西鶴名残の友』巻二ノ一に名を見、保俊は『物種集』（延宝六年刊）『二葉集』（同七年刊）に各四組、西鶴序のある『点滴集』（同八年刊）に一句採られるのみ。西柳に関しては野間氏に指摘あり、摂州河辺郡山本村の有徳人坂上与次兵衛、広岡宗信撰『桜集』（号政英、『詞林金玉集』より）、写本『ねちふくさ』に句が見えるぐらいの人だった（前掲稿）。よって後三名を除くことに、そう苦労はしなかっただろう。

ならば、新たに加えた遠州・貞因・路春・宗久・栄春・清勝はどうか。上記のうち、遠舟・貞因・路春・清勝の四名が『生玉』の出句者である。しかも遠舟は『生玉』が初出[注(5)]、かつ以後の西鶴と最も密なる関係を保った者の一人である。即ち、『独吟一日』追善一〇五句中しんがりの百五番目をつとめ、『大坂歳旦』では引付三五〇句中三四九番△三五〇は天王寺道寸）、『百人一句難波色紙』でも九十八人中九十七番（巻尾は難波西鶴）、西鶴の編著に顔を出さぬこと殆どなかった（表(3)参照）。これを遠舟の側から見ると、まだ調査不充分であるが、例えば延宝八年刊の『太夫桜』には、『生玉』出句者と思われる者が五十名近く（判別困難もあるので）いる。むろん、梅翁・西鶴・幾音等著名俳人もいてすべてがそうだというのではないが、間宮永房・早川安之・和田一任・宗之・一成・可秀・均明、あるいは重村忠友・浜氏武慶・阿部寸志・利方・利玄・有年等、他に手がかりの得難い者ないしは少ない者が、多く入っているのである（『歳旦』に見える井田方流・高野幸則等も入る）。西鶴と遠舟の近さを遠舟の方から証明することにならないだろうか。

清勝は万治元年刊の『鸚鵡集』に「大坂住／清勝」として一句入集するのが彼かとも思われるが、『遠近集』以下が多く、西鶴よりはやや先輩になるか。撰著『蛙井集』を持ち、『生玉』巻頭第三を付けたことは先述の通りである。貞因と路春の俳暦は古い。貞因は狂歌師貞柳の父、貞室門（『俳家大系図』）で貞室撰の『玉海集』（明暦二年八月刊）に三十九句入集、同年正月刊の大阪初の撰集（蔭山休安撰）『夢見草』十六句の、「大坂之住／鯛屋庄九郎／宗継」も彼かと思われ[注(6)]

（『毛吹草追加』にも3句）、『古今夷曲集』（寛文六年刊）以下の狂歌集に多数入集すること周知の通りである。『哥仙』に入っても恥しくない人でもあるが、息子良因（貞柳）ともども『生玉』（ともに一句）に参加したことも与ったか。同じく貞室門（『大系図』）と言われる隅田路春も『玉海』から名を見、『哥仙』に入る資格はあると思われるが以後さほど目立たず、かなり傍観的な姿勢で『生玉』（1句）にも出句したのではないかと思われる。以後の西鶴系の俳書では『百人一句』に入るのみ。上記二名も、『生玉』への助力がなにがしかは影響していると思う。

それならば『生玉』と関係なく加えられた栄春と宗久はどう考えるべきか。栄春は大阪井岡孫兵衛喜之の母、母子ともに『夢見草』に入集（8句と21句）、西鶴の編む『古今誹諧師年鑑』（延宝四年刊）でも、大阪五十九人中十一番（栄春）と十三番（義之）に位置していた。栄春は同じく西鶴編の『俳諧女哥仙』（貞享元年〈一六八四〉刊）にも入る。表(2)では『烏帽子箱』以後入集が認められないが（表(3)の『点滴』に1句）、「杉本光女、柏原ノ拾女ニモ劣ラヌ才女タリ」（『大系図』）と評される以上、これも夫方孝とともに名をあげていた川崎方女にもう一人加えて、一篇に彩りを加えたと考えてもよいようである。残る一人、宗久については前田金五郎氏に論がある。

二月十四日に宗久より申来、天王寺清水清光院ニ、先年貞徳発句ニ道節第三仕置被申候、打捨て有之ニ付、万句興行ノ由、則我等ニも発句せよと被申候故（このあとに宗静の発句あり）

（前田金五郎氏「土橋宗静日記」〈「船場紀要」七号、昭和53・2〉に拠る。傍点は筆者）

前田氏は『土橋宗静日記』のこの記事から、西鶴が『生玉万句』の序で「世人阿蘭陀流などさみしてかの万句の数にものぞかれぬ」と記した「かの万句」を、多分宗久主催で行われたこの興行だったとされ（『生玉』序は、この興行を失敗に帰したと記す）、宗久は末吉宗久、連歌師として著名で、元禄七年（一六九四）閏五月十六日大阪本町宿で没と紹介された。同稿は宗久の連歌活動にも及ぶが（承応三年〈一六五四〉平野権現社千句興行出座等）、因みに『平野郷町誌』[注(7)]第十三章「神社」を見ると、貞享二年〈一六八五〉抗全神社連歌会に土橋宗静ともども出座しているし、元禄元年の「漢和

連句」にも名を見ることができる。とすれば、この宗久は、その俳諧観において、「宗静に取っては、連歌こそは、自己が真剣に打込む文学であって、俳諧ひいては俳人との交際は、取るに足らぬものであった」（前田氏稿）宗静と殆ど変らなかったものと考えられ、従って宗久主催の万句興行は、同じ教養と趣味の人々が集まった慰み程度のもの、『生玉』の序が激怒するように排他的ではなく、もっと軽い気持で新興派を外したようにも思われる。ところが外された方がカチンときた。そこで手段を尽し人（句）を集め（宗静や同じ平野の柴屋寺奉納連歌発句を持つ祐可も出句している）[注(8)]、結果的にはこれが成功し、気をよくして景気のよい序文をつけ出版した。

そうも臆測されるのだがそれはさて措き、俳諧での宗久は確かに見出し難い。『哥仙』に入る「みくらべよ富士は磯崎の松の雪」と同じ句が『古今誹諧師手鑑』に載り、「大坂天満／八木宗久」（八木氏とも称す）とあるのだが、表(2)に示す『遠近集』（2句）『寛伍集』（5）『鶯笛』（3）のうち、前二者は「大坂（住）宗久」なるものの「天満」は分けられており、『鶯笛』は「宗久」と記すのみ。『貝殻集』に一句あるが「摂州遠里小野」である。

大分脇にそれたが、ともかく西鶴はこの宗久を『哥仙』の中に新しく加えた。前田氏は両人の繋りを連俳ともに長じた西山宗因の兄弟弟子たる処に求め、いったんは除かれたためにそれに反発して『生玉』を出しながら再びかく入れたことを理由に、西鶴が大阪俳壇を巧みに遊泳していたことの証とされたが、見方を変えれば、自らの一派（あるいは新人群）を排除した宗久を入れることによって、実際にはかなりの新人群を入れて偏っている『哥仙大坂俳諧師』の構成を、公平に編んでいるように見せかけたとも受け取れるのだがどうだろうか。

二　哥仙大坂俳諧師――その二――

座順の移動に目を移すと、まず目につくのが鶴永の十五番右から四番右への昇格である。以下座順の繰りあがっている

者をあげると（上段△印）、方女（八右→五右）、一得（十一右→六右）、久任（十一左→七左）、酔鶯（十六左→八左）、由平（十四右→八右）、不琢（十六右→七右）。これに新人の遠舟を加えると、六番から十二番あたりまでは、『生玉』参加者のオンパレードとなるではないか。逆にさがっているのが（下段△印）、無睦（四右→十六右）、重安（五左→十七左）、行風（五右→十五右）、休安（六左→十六左）、以仙（六右→十三左）、如貞（七右→十四左）、宗信（八左→十五左）等。

もとより筆者は歌仙の座の重さがどういう順なのか詳らかにせず何とも言えぬが、巻頭の空存・西翁から四番左の玖也・保友・意朔・立以・正甫までと巻軸近くの一六・道寸・休甫の十人は『画図』『哥仙』とも変らず、ここが重いことと上記十人が坐ること、誰しも異存のない処だろう。空存（寛文頃没）は早く『毛吹草』（正保二年刊）に五句入集、万治三年刊の高瀬梅盛撰『俳仙三十六人』に入る大阪俳人三人（宗因・空存・休甫、平野末吉道節を入れると四人）の一人。『古今誹諧師手鑑』では二四六名中十一位、大阪五九名中二位。休甫は近世初の撰集『犬子集』（寛永十年刊）に入る唯一の大阪俳人、『古今誹諧師手鑑』第七位、大阪では第一位、『西鶴名残の友』首巻四章は、第一章で守武・宗鑑を出し、ついで休甫（大阪）、貞徳（京都）、徳元（江戸）を出すが、つまりは大阪俳人の権與と認められていた人である。続く西翁から道寸までも言わずもがな（表(2)参照）、道寸はこの頃宗因門として西鶴とも面識あり（野口在色『誹諧解脱抄』）、『大坂歳旦』の引付三百五十句では巻尾に坐っていた。

概して言えば、『画図』では、右に準ずる者が以下に順次並んで、いわば年功序列の感深いのだが、その無睦・重安・行風・休安・以仙・宗信等が、『哥仙』では十五―十七番に移っているのである。後方を固めるの意では比重はほぼ同じか。古風から宗因門に移るとされ、『大坂独吟集』にも入る重安の五左から十七左への移動は、むしろ重さを増したと言えるかもしれない。また逆に、『哥仙』で五左ながら鶴永の後につく片山秋月などは、『画図』の十七左の方に居心地のよさを感じたかもしれない。

表(2)『歌仙』入集者の「生玉」以前主な撰集への入集状況

句数（生玉万句に見える俳名）	西山梅翁	追	北峯正甫	4	井原鶴永	10	和気遠舟	2	牧野一得	9	西田久任	2	藤田不琢	3	前川由平	3	岡田悦春	3	藤原貞因	1	高木松意	4	隅田路春	1	中堀幾音	4	山口清勝	3	一歌仙入集者	九昌院空存	松山玖也	梶山保友	意勢村意朔	喜多村立以	片山秋月	川崎方女	白江酔鶯	谷忠由	八木宗久	井岡栄春
鷹筑																																	10之次							
毛吹	16																													3										
毛吹追	8				5												8		?3											31	6	20								
夢見	6	7			100												25		?16											110	27	31	10之次		1			6		8
玉海																	大文字屋		39				1									13付12	11		2					8付2
口真																																								3
崑山																	4															91								
崑山土																	大文字屋						4																	
砂金																	二郎兵衛		16				1									6								1
鸚鵡	7				26																		1		1		1					12								
牛飼		2			66														20				2							20	6	3								
鉋屑		6																	13付1											12										
捨子		1																	3																					
新続犬		12			9	7													7											22		90	99							
境海	18	27付10															2																				蓼藍16白云			
懐子	15	32付223			1付3												2													22付27	125付114	50付114	6付32		1			4		
烏帽					18														6											5		8			24	17	11			2
雀子		1			1																									2		1					6白云			
埋草	44	9															2								4					1	2	15			4					
佐夜		17付20																	6						2							35付17	21付24						1付1	
小町踊	3	7			8														6						1					9	21	14	7	37	6	13				
遠近	3	14			86																			11	1	1	1			11	83	61	8		6		5	15	2	
貝殻		20																												1	8	1	1						摂津1	
続山井		3											3												1							26付22	35			1			小野	
細少石																											1	1												
寛伍	4	83			1												7	24							23					21	8	3							5	
蛙井		7					10												付1	7付3	9付9									14	6付1	20付2	4付2		1	1				
落花	1	7	11		1							14		8		3	45	10	3		8				36		10			91	56	41		1	1		1	1		
雛草			6		2	2		11	11			1	1		11		1	1桜		5					4		1			3	8	9	215		1			1		
塵塚		1												3			7				3				2								5							
法華																					18													1						
続大和					1																1		1							4	1								
大海		3			5												10								13		17			5	19	16							
続境		5	49														2								15					3	170	55	61	3						
手繰		6	22														15				8				5		7				23	12	13	3						
続詞友		1																																	6		2			
名所		2																			5										96	1	1		5					
桜川	1	1	34					1	2									4			2				11					2	452	18	4					1		
鶯笛							4																												2					3

坂上西柳	武野保俊	浜田春倫	西村可玖	中堀初知	津田休甫	夕陽庵道寸	半井一六	伊勢村重安	蔭山無睦	蔭山休安	生白庵行風	広岡宗信	井口如貞	高滝以仙
					15 大子									
					1 鷹	120 弘永								
												5 定房		
					30			9		100		28 定房	2	
					1								16	
					14			4						
												35 定房	65	
													1	
													4	
		5						1				7		
					4							1	6	
		2												
					12		39 文都			3		13	131	
			嘉祭 2		2									
					44 付27	57 付76 弘永		4 付10				11		
		15 付16		4										
					5									
					1	9								
	7	15 付1		1		5 弘永		5			3			
		4	都草 4		1	19 弘永		1		1	1	6	13	
		56	99	3	7	3	10	131		1		3	6	
	3					20		2					1	
							25 付1						117 付6	
				3										
	35		2	12		13	2	5					2	3
					2			5 付3			1 付1	付2	5 付4	2
	38	27	8	39	1	2	5	13	22	1	2	1	62	30
	4			2	40	5	190	3	22			8	147	5
				5		2								6
		2	1	1	1		1	2					2	
				10			6	8						27
	36	6	4	17	1	4	37	7					68	13
	6	6		10		2	52	3					21	32
			11											
	13		3			1							2	
	51	6	3	11		1	2	8	2				8	81

注　出典一覧

大阪　夢見（蔭山休安撰）　蛙井（山口清勝撰）
　　烏帽（喜多村立以撰）　落花（高滝以仙撰）
　　遠近（西村吉竹撰）　難草（中村宜休・樋口如見撰）

鷹　筑―鷹筑波（寛永一九〈一六四二〉）　牛　飼―牛飼（万治一）
毛　吹―毛吹草（正保二〈一六四五〉）　鉋　屑―鉋屑集（万治二）
毛吹追―毛吹草追加（正保四）　捨　子―捨子集（〃）
夢　見―夢見草（明暦二〈一六五六〉）　新続犬―新続犬筑波集（万治三）
玉　海―玉海集（〃）　境　海―境海草（〃）
口　真―口真似草（〃）　懐　子―懐子（〃）
崑　山―崑山集（〃）　烏　帽―烏帽子箱（寛文一〈一六六一〉）
崑山土―崑山土塵集（〃）　雀　子―雀子集（寛文二）
砂　金―砂金袋（明暦三）　埋　草―埋草（寛文三）
鸚　鵡―鸚鵡集（万治一〈一六五八〉）　佐　夜―佐夜中山集（寛文四）

堺　境海（阿知子顕成撰）
　　埋草（正法寺成安撰）
　　貝殻（長谷川秀政撰）
　　寛伍（南元順撰）

小町踊―小町踊（寛文五）　塵塚（池嶋成之撰）
遠　近―遠近集（寛文六）　続境（阿知子顕成撰）
貝　殻―貝殻集（寛文七）　手繰（〃）
続山井―続山井（〃）
細少石―細少石（寛文八）
寛　伍―寛伍集（寛文一〇）
蛙　井―蛙井集（寛文一一）

法　華―誹諧法農華（寛文一二）
続大和―続大和順礼（〃）
大　海―大海集（〃）
続　境―続境海草（〃）
手　繰―手繰舟（〃）
続詞友―続詞友俳諧集（〃）
名所―俳諧発句名所集（〃）
桜　川―桜川（〃）
鶯　笛―鶯笛（寛文一三）
塵　塚―塵塚（〃）

ともあれ、十五右から四右に昇った鶴永の破格は明らかで、次に遠舟（新加入）、一得・久任・不琢・由平・素玄の昇格が目立つ（酔鶯もいるが）。これに新しく加えた貞因・路春・清勝を併せれば、『生玉』出句者重視は、誰の目から見ても明らかだろう。そのために、まず可玖以下の五名を除かねばならなかった。次に無睦以下を移すわけだが、しかしこれはそうすることで、結果的には前後を経験者で固めてその中に新人を繰り入れる形となり、一応の均衡が保たれる結果ともなっている。そう装いながら新人をはめこんだ編者西鶴の手腕を称すべきか。しかし、どう装っても、やはり『哥仙』における『生玉』重視の印象は拭いきれないのだった。

表(2)は、『哥仙大坂俳諧師』入集者三十六人（除かれた五人も付す）の、『哥仙』以前の主な撰集への入集状況を、『生玉』出句者とそうでない者に分けて示したものである。三十六人中『生玉』に入る者十五人。まず他の二十一人の入集状況を見るに、『夢見草』より前の入集者が空存・玖也・保友・意朔・道寸・休甫の六人（彼等がよい位置を占めるのが再確認できる）。ついで『夢見草』初出が秋月・忠由・栄春・如貞・休安・重安の六人。これで過半。残る九人のうち、宗信は初号定房であれば『毛吹草追加』から。一六は万治三年刊の『新続犬筑波集』。立以・方女は寛文元年刊『烏帽子箱』であるが、立以は該書の撰者だから当然それ以前に俳歴があろう。残るは行風（寛文四年刊『佐夜中山集』）、酔鶯（同六年刊『遠近草』）、宗久、以仙（同十年刊『寛伍集』）、無睦（同十一年刊『落花集』）のみ。この五人が『生玉』の主勢力とほぼ同時期といえよう。ただし、右のうち宗久は前述の如き教養人。生白庵行風は狂歌で名高く、寛文六年刊の『古今夷曲集』をはじめとして、『後撰夷曲集』（同十二年刊）、『銀葉夷哥集』（延宝七年刊）の撰者だった。結局は酔鶯・以仙（『落花集』の撰者）、無睦にすぎず、これも筆者の調査洩れを恐れる。

繰り返しになるので略述に従うが、『生玉』出句者の中で空存等十二名とほぼ肩を並べ得るのが正甫・悦春・久任・貞因・路春・宗因の六名。彼等が宗因に近いか傍観的立場にあったことも前述した。残る九名で、比較的早いのが清勝と一得（『鸚鵡集』と『新続犬筑波集』）だが、清勝については乾氏に確定できず（「遠近集の研究」）、一得についても種茂氏

（「大阪談林俳壇の研究」Ⅲ）が疑問を出されている。そして、確かに二人のこの後は、かなり降りなければ出てこない。あとは幾音が若干早いが（寛文三年刊『埋草』）、以上三人を含めて右九人は大差ないと考えてよく、彼等が寛文十三年の時点で「ハイカイノウタニタツシタルヒト」と客観的に言えたかどうかはかなり疑わしい。もっとも、右の事実は既に『画図』においてもそう変らず（新人では清勝と遠州が加わるのみだから）、新人を多く入れようとする西鶴の意図は、『画図』から既にあったことになる。ただ、この種の編纂物では、最後の数人を誰にするかが最も難しい処だろうから、清勝・遠州を入れて仮に可玖・初知を落とす事態となっていたら、局面はかなり厳しかっただろう。そして、これに座順の移動を加えれば、やはり『哥仙大坂俳諧師』の方が、より『生玉』色を強く出していると言えるのである。

そこで最初に出した序文の問題。なぜ西鶴は初撰本を都人が撰んだように見せかけ、再編では内容を変えながら今度は無署名にしたのか。野間氏は絵の巧拙等も勘案されながら初撰本を半分は道楽で出した私家版とされるのだが（前掲稿）、それ以外に何か考えられぬだろうか。常識的に考えれば、京の人が大阪の歌仙を撰んだ体にすれば客観性を装え、しかも権威がつく。しかし、林定親・川崎方孝（立圃門）、岨山高故（重頼門）井岡喜之（貞室門）・中村宜休（季吟門）等々を除いていてはどう考えても不公平の譏り免れがたく、いずれ底が割れてしまう。その時のために、問違えようもない処を間違え（洛葉之住）、ありもしないような署名（雲愛子）を付したのではなかろうか。そして、やはり正体はばれた。ならば猪口才な細工はやめて正道をと書き直したのが再編本の序文で、編者はおのずと判る筈と、署名はしなかった。内容の改変まで含めて、『画図』から『哥仙』への過程がすべて西鶴の意志で行われたのか、周辺に助言あったか、想像をたくましくすれば、『生玉』興行時西鶴に何らかの約束あり、強い要請があって変えられたとか、さまざまな事態が考えられるがすべてが臆測、いまは、『生玉万句』興行に成功するやすぐに、自己中心的な大阪俳壇編集をやってのけた、強引ともいえる西鶴の意気込みを確認するにとどめておく。

表(3)は、『哥仙大坂俳諧師』入集者の、『生玉』以後の主に西鶴の編纂物への入集状況を、『生玉』出句者とそれ以外に分けて

表(3)「哥仙」入集者の以後西鶴編纂物入集状況（含哥仙に入らぬ主なる「生玉」出句者）

「生玉」に入り「哥仙」にも入る者	西山梅翁	北峯正甫	井原西鶴	和気遠舟	牧野一得	西田久任	藤田不琢	前川由平	岡田悦春	中林素玄	藤原貞因	高木松意	隅田路春	中堀幾音	山口清勝
哥仙	一	四	四	六	六	七	七	八	九	九	十	十一	十一	十三	十四
独吟一日	1			105		32		31	38	102	10	33		36	
大坂歳旦		18	1 三物	349		12		10	28	21	11			17	
古今手鑑	246 59	68 10	199 44	221 52	241 57	160 32	158 31	165 33	204 47	214 50	194 43	169 35		182 38	206 48
物種	43 (1)	5	38	4	7	1		4	1	8	7	1		5	
二葉	63 (1)	2	54	37 (3)	7	1		12	1	7	5	1		8	
大失数	1			1 指合	1		1 脇	1 指合		1	後座	脇			脇
点滴	16	7	86	3	6			32		3	2	34		3	2
山海	一		十八	四	八	六	八	五		十二	九	七		十一	十一
百人一句	1	36	98	97			14	8		4	33	20	37	18	22
三ケ津	一		十八	十	十五			七							
高名	1			66	38			30							

「哥仙」で「生玉」に出ない者	九昌院空存	松山玖也	梶山保友	意勢村意朔	喜多村立以	片山秋月	川崎方女	白江酔鳶	谷忠由	八木宗久	井岡栄春	高滝以仙	井口如貞	広岡宗信	生白庵行風	薩山休安	薩山無睦	伊勢村重安	半井一六	夕陽庵道寸	津田休甫
哥仙	一	二	二	三	三	五	五	八	十	十二	十二	十三	十三	十五	十五	十六	十六	十七	十七	十八	十八
独吟一日		2	3		8							9		7				5			7 1
大坂歳旦		1	2	3	7							9	8	6				5		350	
古今手鑑	11 2	40 5	243 58	76 12	111 18	114 20	112 19		142 26	139 25	70 11	153 29	120 22	107 17	216 51	52 7	184 39	95 15	66 9	32 4	1
物種		25 (3)	18 (4)			2		1				8	1	1					2	4	6
二葉		14	23	1		1		1				20	6	2				3	2	4	
大矢数			1									脇	1								
点滴		9	5	3	1						1	18	5					32	4	2	
山海			一	二	二							四	六		三						
百人一句			2	3	4			35				7	6		16						
三ケ津			二	四	十七							五	十三								
高名			7	6	9		7					27	14								

「哥仙」で「生玉」に出ない者	柏一礼	中堀初知	三好古竹	岩井武仙	小野松緑	早川西随	志水正察	大須賀胤久
独吟一日	103	34	97	89	35		50	100
大坂歳旦	22	15	33	三物	26		30	
古今手鑑							237 56	
物種	4	4	1	3		2	5	4
二葉	7	2	1	12		2	11	6
大失数				銀	1		1	
点滴	2	10	1	7	1		6	1
山海	十七				十七			
百人一句	49	47	77	67	27	64	45	42
三ケ津								
高名							19	

注

書名は略称のままとする。
表内の数字は、
哥仙・山海・三ケ津―歌仙の座順。
独吟一日―追善発句105の順位。
大坂歳旦―三物→巻頭三物（9組）、算用数字―引付350句の順位。
古今手鑑―上段は全246、下段大阪59人中の順位。
物種・二葉―付句入集数　下の（　）は入集多い者の順位
大失―漢字は役割の略称、数字は入集句数
点滴―入集句数
百人一句―全98句中の順位
高名―全66句中の順位。
□は巻頭・巻尾、ないしはそれに近い者。

示したものである（『生玉』の他の主要メンバーも付す）。

これを見れば、『生玉』出句者との関係の方が密なること、一見して明らかだろう。『生玉』に出ない方では、玖也（延宝四年四月没）、保友・意朔・立以・以仙・如貞等、宗匠として立机している現役とは密だが、空存以下、方女・酔鶯・忠由・宗久・栄春・宗信・無睦・休安等、故人または老齢者（または余り活発でない者）には冷たい。一六・道寸・重安がほどほどか。一方『生玉』参加者では路春・悦春が例外で、他とはもれなく濃密な関係を保っている。特に新人群、遠州・一得・不琢・由平・素玄・松意・幾音・清勝等が目立つ。そしてまた、付して示した、一礼・武仙・松緑・初知・古竹・西随・正察・胤久等の『哥仙』には入らなかった『生玉』出句者も、相応に遇され、『百人一句難波色紙』に入ったのだった（正察は『古今誹諧師手鑑』に入り、『高名集』で全国六十六人の一人に撰ばれる）。更に言えば、右のうち由平・一礼・武仙の三名は、宝永二年（一七〇五）興行の西鶴十三回忌追善集『こゝろ葉』にまでつきあうことになるのである。

因みに記せば、延宝七年刊『難波鸕』の「俳諧点者」に名を連ねる俳人は次の如くである。

西山梅翁　梶山保友　大津如貞　伊勢村意朔　井原西鶴　西村重安
西村可玖　北村立以　高滝益翁　前川由平　中堀幾音　牧野一得
高木松意　岡西惟中　片岡旨恕　和気遠舟　野山軒宗貞　青木友雪（惟中の上阪は延宝六年）

以上十八名のうち、『生玉』出句者が梅翁・西鶴・由平・幾音・一得・松意・遠舟・友雪（執筆として）の八名、これに延宝六年刊『物種集』巻末の「大坂中俳諧月次日」から、松緑と生田末清〈管見の範囲末清の『生玉』以前は『落花集』に「大坂／末清」〈1句〉を数えるのみ）を加えることができる。彼等また、各自、おのれの場を確立していたのだった。最後に蛇足すれば、「長持に春そくれ行更衣」が『哥仙』における鶴永句である。試みにこれを、「我が身や心の月や影法師」（空存）、「すりこ木も紅葉しにけり唐からし」（西翁）、「彼玉をためをき筒の花火哉」（玖也、謡曲「海士」より）、「秋来ぬと目薬ほとのけさの露」（保友）、「君か春や万歳々々万々歳」（意朔）等の言語遊戯的な句に比すれば、西鶴句がいかに印象鮮明な具象性を持っていることか。背筋をぴんと伸ばして坐す真直な姿勢と前方を直視する鋭い目は、「そしらば誹れわんざくれ」（『生玉』序）という気張りと、自信を示しているようである。

翌延宝二年の歳旦吟から、鶴永を西鶴と改号。

三　『独吟一日千句』の追善発句

さて、延宝三年（一六七五）四月三日に妻を亡くした西鶴は、同八日に一日独吟で百韻十巻の千句を詠んで亡き妻に手

表(4)「独吟一日」追善発句一覧

「独吟一日」で「生玉」に出ない者	2 ○松山玖也	3 ○梶山保友	4 西村可玖	5 ○伊勢村重安	6 阿知子顕成	7 ○広岡宗信	8 ○喜多村立以	9 ○高滝以仙	11 杉本玄室	13 日野一枝	14 井手元之	15 高松重賀	16 横地夢遊	17 片岡旨恕	19 生玉宗本	20 小野随心	21 今井宗顕	22 今西正盛	23 山本季延	24 江崎亦楽	25 奥田一友
夢見					11									1 宗岑							
烏帽																			3		
遠近	∧	∧	∧	∧		∧	∧	∧										14			
蛙井	略	略	略	略	1	略	略	略										1	付1		
落花	∨	∨	∨	∨	82	∨	∨	∨										1	9		1 大坂一友
難草					1									海4 大					7		
桜川					27				1										1		
大坂歳旦	1	2	4	5		6	7	9		97	128		339		180	三物					水男 下町
古今手鑑					73 7									223 53				162			
物種	∧	∧	∧	∧	2	∧	∧	∧								1				3	伊丹
二葉	略	略	略	略	2	略	略	略					1	7		2		1			伊丹
大矢	∨	∨	∨	∨		∨	∨	∨					1	1 指合						1	
点滴					2							1 大坂重賀	1	1				2 南都		6	
山海														十							
百人一句														10							
三ケ津														壱							
高名														57							

「独吟一日一句」で「生玉」に出ない者	27 楠本 一不	28 浦上 真似	29 吉住 楽少	30 山田 秀信	37 斎藤 禾刀	39 光吉 定祐	40 武部 友定	43 多古 夕風	45 広瀬 三久	46 谷村 不徳	47 野沢 玉親	51 竹島 冷笑	52 氏家 昌忠	54 高石 石斎	55 小島 良賢	56 中村 敬英	57 豊田 吉次	58 平井 梅悦	60 宮原 冬扇	61 高田 直成	62 横田 舞蝶	63 松岡 宗保
夢見																						
烏帽							1 武井										大坂 紀国屋					
遠近							16 大坂 友定										2 大坂					
蛙井															2 大坂 良賢		付1 大坂					
落花							4 大坂 友定										6 堺					
難草							3 大坂 友定		3 大坂 三久													
桜川																						
大坂 歳旦				266	16	23			42	40	三物			三物			矢住 友田	268				84
古今 手鑑					146 27									175 39								
物種					3	5		1			1											
二葉					2	6		1			3			1								
大矢					1		1 友定							後座					1			
点滴					2	1		14			1			2	2 大坂 良賢	1 山城 敬英		1		1		
山海					九														去 高岡			
百人一句					34									75					96 高岡			
三ヶ津																						
高名																						

99	98	96	92	90	88	87	86	85	83	81	80	78	77	76	75	74	73	72	71	70	68	66	64
高山 三昌	岡本 春也	岡村 直之	小川原戯言	岡崎 秀綱	村上 儀一	数藤 佐重	内田 網之	関岡 破瓶	磯貝 魚市	家長 一有	石川 無哲	西村松葉子	沢田 重長	人見 口和	三宅 独友	今村 外風	平野 末成	森 種成	中原 不背	三宅 香雪	大石春三子	富上 菊永	笑輪 存計
												松3大坂葉子											
12大坂三昌																							
1大坂三昌																							
25					183	115須藤		81						104	173		86	346					105存景
2																2	1						
3綸							2網千									1	1	2					
				1		1佐重			1魚市								1	1				1菊永	
1大坂三昌	1南都春也			152		1大坂佐重				1今井一有								1				1大坂菊永	

「独吟一日」で「生玉」に出ない者	夢見	烏帽	遠近	蛙井	落花	難草	桜川大坂歳且	古今手鑑	物種	二葉	大矢	点滴	山海	百人一句	三ケ津	高名
104 広橋 慶顔							三物					2和歌				
101 樋口 如見			3河内		2尾崎			235 55	4	5			十三	21		
1 ○西山 梅翁	10 ○藤原 貞因	32 ○西田 久任	33 ○高木 松意	12 柏原 浄久	18 小西 正行	26 花実庵貞富	31 ○前川 由平									
59 安井 豊由	65 水野 栄甫	69 ×里村 似扇	34 中堀 初知	35 小野 松緑	36 ○中堀 幾音	38 ○岡田 悦春										
41 井手 元春	42 ×里村 似扇	44 ×佐々木重吉	67 ×渋谷 問也	48 松山 一飛	50 志水 正察	53 衣笠 常願										
84 山下 一志	89 岩井 武仙	91 ×湊 武慶	93 萩原 正俊	69 下山 心入	79 岩田 峯雪	82 野中 風角										
97 ×三好 古竹	100 大須賀胤久	102 ○中林 素玄	103 柏 一礼	105 ○和気 遠舟												
49 青木友浄(執筆)	(36名)															

69名

「生玉」に出た者

注

哥仙大坂俳諧師に入る者　○印→15名

空存―寛文年間没（俳家大系図）休甫―明暦頃没。

栄春―寛文末延宝始没歟（大系図）。玖也　延宝四年四月没

意朔・一得・不琢・清勝等が脱ける

×印は「生玉」に姓の記されないもの

表の数字前出表(3)に同じ。ただし顕成の古今手鑑下段は堺21名中（含岸和田1）の順位

向け、大阪阿波座堀、板本安兵衛から出版した。その時追善の発句を送った者が一〇五名おり、それを表(4)に示した。上欄の数字は並んでいる順序、『生玉』に既出の者は後に名のみまとめた。梅翁・玖也・保友・可玖・重安・顕成・宗信・

立以・以仙・貞因が上位十名、胤久・如見・素玄・一礼・慶顔・遠州が後六名である。こういう場合の序列もまた詳しく知らないが、しかし上位に名士を配し、後尾を身辺で固めたと言い得よう。既述の通り、遠州が巻尾をつとめる。

全一〇五名のうち、『哥仙』に名を連ねる者十五名。『生玉』は三十六名。鶴永・守武を除いても『生玉』の出句者は二〇四名（祝賀発句者を含む）になるのだから、意外に少ないという気もする。大物で言えば伊勢村意朔、所謂同輩では一得・不琢・清勝等が見えず、その事情は分らない。摂津・和泉近辺の古老格ないしは趣味人たる中では三田浄久・藤田長正（堺）程度しか見えず、堺一円、河内且保・種好、平野の宗静・勝政、また大阪の好道等が見えないのは、彼等が直接西鶴と交渉あって『生玉』に参加したのではないことを物語るかもしれない。『生玉』関係者の意外に少ない理由は如上のごとくかもしれぬが、しかし、梅翁以下の上位十名が、大阪俳壇を代表するメンバーであることも間違いないだろう（顕成は堺）。右の事実はつまり、彼等が（宗因は除いて）、西鶴の『哥仙大坂俳諧師』を公に認めたことになるのではないか。故人の追善という条件があるにせよ、仮に『哥仙』が恣意に走った許せぬものと受け取られていたら、かく重鎮が顔を並べることはなかったろう。きわめて俗的ではあるが、西鶴は、ここで大阪俳壇を編集するに足る人物と公認された。中には公刊されるなど思わぬ人もいたかもしれぬが、ともかく西鶴は認知されたと感得し（または認知させようと考え）、出版したのだ。そして、西鶴のこの自信の発露こそが、翌延宝四年正月の、あの厖大な『大坂歳旦』の刊行だったと思われるのである。

ここで『生玉』『哥仙』に載る以外の俳人について寸言すると、阿知子顕成は既に『夢見草』（11句）に入集を見、万治三年刊の『境海草』を撰じ（ただし那賀盛之の遺志をつぎ）、『続境海草』『手繰舟』（ともに寛文十二年刊）の撰集もあった。また最も注目されるのが片岡旨恕（17番）である。『宗因七百韻』（延宝五年刊か）の「玖也追善」百韻の句引に「宗因家従」と載る旨恕は、早く『夢見草』に一句入集（宗岑号で）、『大海集』（片岡松舟軒旨如）にも四句入るが（以上種茂勉氏「大阪談林俳壇の研究」㈠）、西鶴との関係では、延宝四年刊と推定される当人編の『草枕』に西鶴との両吟歌仙一

巻、西鶴・西舟・西夕との四吟歌仙一巻が収まり、同年十月刊の『古今誹諧師手鑑』に入るほか、『大矢数』では指合見をつとめ、『高名集』にまで及んでいる。

次いで斎藤賀子の父禾刀（37番）・高石石斎（54番）・樋口如見（101番）。この三名は『百人一句』まで及ぶ。また小野随心（20番）光吉定祐（39番）。彼等は延宝四年刊の宗因編『天満千句』（如見）や翌年刊の『宗因七百韻』（禾刀・定祐・如見）に参加、石斎には『珍重集』（延宝六年刊）もあるのだから、『生玉』以前に俳歴ある筈だが、大阪の撰集に限れば殆ど見出せない。また、九十番に名を見せ『大矢数』に一句出す岡崎秀綱は大和宇陀の住、西鶴序を有する『点滴集』に一五二句の最高句数を入れ、野間光辰氏が該書の実質撰者とされる人物である。[注(9)] この追善句送付者と最も重複して名の載るのが『大坂歳旦』の五十二名であることは年時の近接から当然のことだが、表(4)に出る三十一名（吉次・一友を除く）の他に、『生玉』出句者で次の二十一名がいる。

貞因・由平・久任・初知・松緑・幾音・悦春・元春・一飛・正察・豊由・栄甫・峯雪・一志・武仙・正俊・一永・古竹・素玄・一礼・遠州

逆に、『独吟一日千句』追善発句のみで他の西鶴編（主に編纂物）に見えない者、つまり追善句だけで姿を消す者は管見の範囲次の二十名である。

杉本玄室(11)　今井宗顕(21)　山本季延(23)　楠木　一不(27)　浦上　真似(28)　吉住楽少(29)　竹嶋冷笑(51)
氏家昌忠(52)　中村敬英(56)　宮原冬扇(60)　横田　舞蝶(62)　大石暮三子(68)　三宅香雪(70)　中原不背(71)
沢田重長(77)　石川無哲(80)　家長一有(81)　小河原戯言(92)　岡村　直之(96)　岡本春也(98)（57番豊田吉次は判別不明で除く。氏家昌忠は『生玉』に袋屋昌忠、中村敬英・家長一有・岡本春也は『点滴』に「山城／敬英」「今井／一有」「南都／春也」とはある。71中原不背は「不省」と読め、『歳旦』106の中原不省と同一人か）

この中で山本季延は表示のごとく『烏帽子箱』以後大阪の撰集に洩れなく顔を出し、相応の俳人だったようである。ま

た小河原戯言は『太夫桜』の「桜五」と「藤発句」[注100]に小河原戯言で名あり（藤発句に出る一有・敬英も家長一有・中村敬英と同一人か）、右二十名のすべてが全く活動なかったというのではなく、今後の調査で訂正せねばならぬ処も出てくるだろう。なお本八十三番のほか『大矢数』に「魚市」としか出ぬ磯貝魚市も、『太夫桜』（桜五）に「イソ貝魚市」と出、既述の如く西鶴編に出る人物の把握に役立つ。

四　大坂歳旦（発句三物）

森川昭氏によって昭和五十年六月号「文学」に紹介された『俳諧大坂歳旦（発句三物）』（板本　海部堀　本屋安兵衛刊）、所謂延宝四年西鶴歳旦帳は、西鶴剃髪の時期を示すことなどまで含めて、実に貴重な資料であった。西鶴物量主義の具現といわれる、三物九組八十一句、歳旦発句（以下「引付」という）三五〇句に及ぶこの歳旦帳は、西鶴のこの時期の大阪俳壇への姿勢を、憤懣なく示している。前年の『独吟一日千句』に寄せられた追善句で自信を得た西鶴が、更にそれを不動のものとすべく、この厖大な歳旦帳を企画実践したと考えられるからである。引付二番目梶山保友の処に「当年は句なし」とあるのだから、少なくも大物については、西鶴の方から求めたことになる。さてそれなら、その内実はどうなっているのか。表(5)は、三物の九組と引付四十番までを示したものである。三物には『生玉』出句者が四名（元春・武仙・重成・尚政）、『独吟一日』が四名（慶顔・石斎・随心・玉親）。新顔は、野間氏（『補删西鶴年譜考證』）が一族ではないか推定される松遣子大鶴（『大矢数』では松雪軒）、また「鶴」の字のつく無徳庵鶴爪（『大矢数』では松寒軒）、西鶴を含めこの三人が第一組を担う。二組以後の新顔は衣笠一鶴・藤田通意・安平次重春・松井梅一・西山可定・吉田川柳・米川立波・北村丸鏡・少□不知・須田幽印・佐生酔喜・野田一竹・中村一風・沢田鶴信・山本偽庵・下山奇貞。西鶴を除く二十六名のうち十八名を数える（衣笠一鶴は問題あり）。上段に『生玉』以前の欄を設けてあるが一竹一風以外は見出し得ぬ。本歳旦帳以

表(5)「大坂歳旦」の三物と引付40位まで（森川氏前掲稿に拠る。以下も同じ）

	大坂歳旦・三物	物種	二葉	大矢	点滴	百人
一	松寿軒西鶴					
	松遺子大鶴	1				
	無徳庵鶴爪					
二	井手 元春					
	広橋 慶顔					
	高石 石斎					
三	衣笠 一鶴	7	4	懐番1	23	
	（生玉衣笠常親）					
	梅遊軒随心					
	↓独吟					
	○藤田 通意					
四	岩井 武仙					
	↓生玉					
	安平次重春			1重春		
	○松井 梅一					
五	野沢 玉親					
	↓独吟					
	○西山 可定					
	吉田 川柳	5	5	1	4	66
六	○米川・立波					
	北村 丸鏡	1	2		17	68
	少□ 不知				1大坂	
七	桜井 重成					
	↓生玉					
	須田 幽印		1武部			
	佐生 酔喜				1大坂	
八	森川 尚政					
	↓生玉祝					
	野田 一竹					
	遠近1雑草1					
	中村 一風			1京屋	1大坂	
	雑草7大坂京・歳山下					
九	沢田 鶴信			1		
	○山本 偽庵					
	○下山 奇貞					

大坂歳旦・(350) 引付	14	19	20	24	31	34	36	37	38
	林 定親	浅沼賛也	若狭藤昌	川崎正信	○橋本道晴	○大西顕他	○戸松飛見	○岩井一静	○野口口守
夢見									
烏帽	70（2位）	1宗貞		1泉屋					
遠近	1	1宗貞	65						
蛙井	1付4								
落花			2	6					
難草	20			1富田氏					
桜川			3						
歳旦									
古今	156 30	188 41							
物種	1	2	1	3					
二葉		2	1	1					
大矢		指合							
点滴	1	1		2					
山海		十三							
百人		11	82	60					
三津									
高名									

引付40位までの既出者

1	松山玖也	6	広岡宗信	11	藤原貞因	17	中堀幾音	25	高山三昌
2	梶山保友	7	喜多村立以	12	西田久任	18	北峯正甫	26	小野松緑
3	伊勢村意朔	8	井口如貞	13	牧野西鬼	21	中林素玄	27	岩橋豊春
4	西村可玖	9	高滝益翁	15	中堀初知	22	柏 一礼	28	岡田悦春
5	伊勢村重安	10	前川由平	16	斎藤禾刀	23	光吉定祐	29	生松勝政

30	志水正察	32	生田末清
33	三好古竹	35	渡辺未学
39	安井豊由	40	谷村不徳

（40人中 新は9人）

○印は管見の範囲手がかりを得ないもの。□内は森川氏の推定。

後では、大鶴が『物種』に一組、『大矢数』では巻頭第四（二十七の第三も）をつとめる。鶴爪と鶴信は『大矢数』巻頭第八と五十九の八。衣笠一鶴は『生玉』『独吟一日』の絹（衣）笠常頼ではないかとも臆測されるのだが（ただし『大矢数』に「妊頼」あり）それは措き、『物種』に七、『二葉』に四、『点滴』に二十三（「大坂／一鶴」）、そして『大矢数』では「懐紙番繰」をつとめた。『百人一句』まで残るのが吉田川柳と北村丸鏡。あとは何とも言い難く、全く足跡らしきものも摑めぬのが○印の五人である。

次に引付上位の四十名。そのうち『独吟一日』までに顔を出さぬ者わずかに九名。しかしそのうち浅沼賛也（宗貞）と西鶴の関係は周知の通りで、林定親（『牛飼』177『素檠』1、号器水）・若狭藤昌（『鸚鵡』13『捨子』23）・川崎正信は西鶴との交渉は浅い方だが大阪俳壇では相当の地位を保っていた（『西鶴名残の友』巻二ノ四で定親を立圃の門弟として姿背かずと評し、正信についても同書巻五ノ二で、一礼・竹亭・昨非・素龍・鬼貫との同座の様を記す）。彼等を含めたこと自体に、斯界を網羅しようとした西鶴の意図がうかがわれよう。○印の橋本道晴等五名は、現在手がかりを得ていない。しかし、上位四十名のメンバーを見ると、大阪俳壇知名士のオンパレードと言ってよく、願いかなった西鶴の鼻うごめかす顔が髣髴されるのである。

しかしここに大きな不審が残る。森川氏に既に論あるごとく、師宗因の句が載らぬことである。宗因は前年春東下して『談林十百韻』の巻頭を吟じたが同年六月には帰阪[注11]句を出せない筈なかった。『生玉万句』から『高名集』まで、西鶴の手になる編纂物で宗因の名がないのは本歳旦帳のみ。しかもその殆んどが、巻頭を飾っているのである（表(3)参照）。仮に大阪俳壇を網羅したとしても、師宗因の句がなければ、点睛の妙を欠くことになる。森川氏は、前掲誌解説で、板坂元・島居清氏の説（板坂氏は宗因と一般談林俳人との間に作風・教養・生活感覚等で相当の隔りがあったこと、島居氏は西鶴に連歌の作品がなかったことが連歌師宗因との間で重大な問題となる）[注12]を享けられながら、更に堺の糸割符商人で俳諧一辺倒だったらしい高石石斎の三物参加（貞享二年の糸割符紛争時高石石斎側と伊丹屋六左衛門が対立、伊丹屋は連歌を嗜み宗因とも交流あり、上記紛争は俳諧派と連歌派の対立ともなっていた—前田金五郎氏前掲稿）から、右説に左袒され

表(6)　「大坂歳旦」で手がかりまたその可能性のある者「花」は「道頓堀花みち」

43	下町　一笑		大矢　一笑
44	井上　正林	難草2 難波正林	大矢　正林
49	天満　宗清	夢2 天満　蛙3 大坂	大矢　宗清
50	森本　江水		花1
51	下村　南達		物2　二1
52	井田　方流		大矢　方流　点1　大坂
57	惟住　重栄	遠3　落3	点8
64	小浜　可政		大矢 可政　点1 大坂　可政
66	藤掛　一之	蛙1 大坂一之 難草 岡山 岡崎	大矢　一之
67	塚上　正保	落1　佳吉	
70	芝田　利重	烏0 大坂　落4 大坂	
72	今津　正式		点1　今津
73	野畑　正重		大矢　正重
75	上月　正重		大矢　正重
77	高岡　正友	蛙1　大坂　難草3 西山	大矢　正友　↓191
78	栗本　一信	難草1　大坂松嶋氏	
80	野里　貞古	難草3	
81	矢倉　可春		物2　二1
83	古川　定圃		百38
88	武村　昌数	落3　大坂	
89	木屋　柴舟		道1 点1　龍野 難千 桜千
90	桑門　順座		物1
95	高野　幸則		大矢　幸則
107	吉田　風鬼		大矢　風鬼
109	野田　正次	↓293尼崎正次	
111	衣笠　為勝		大矢2　為勝
114	藤田　一舟		大矢 一舟
117	小嶋　柳枝	捨子－大坂住 難草3 大坂小塩	点5　大坂
119	深江　乗竹		物2　二2　百71
123	花田　友政		点1　大坂友政
126	岩田　一默		点1　姫路
130	西森　柳葉		点1　大坂
131	北村　正明		生玉の正明か
132	小篠　友政		点1　大坂友政
133	御崎　元尚		大矢　元尚
137	鶴屋　[誰]与		大矢
143	竹山　井蛙	難草2　大坂	大矢　蛙井
144	田中　悪鬼		大矢　百99
147	岡田　光宗		物2　点3
149	下町　松風		花1 大矢 松風子 松風
152	斎藤　賀子		物7 二14 大矢脇 点9 山十八 百28
153	沢田　初女		女歌三
154	矢住　吉次	↓独吟	
157	吉田　正長	落3　大坂	
160	浅井　重友	蛙3 大坂 落2 大坂中沢氏 難草1	生祝の重友か
163	市川　西三		大矢
164	川口　定玄		点8宇和嶋
169	吉崎　重利	夢 烏 堺 摂津	大矢　重利
172	三木　光貞		点1　播刕
184	内田　亀之		古今229 54 大坂 女亀之
185	紙谷　正利	蛙1　大坂	大矢3　正利
187	本布　吉重		生玉の吉重か 大矢 吉重
188	内田　友重	烏1生屋 落1 大坂	物1　梶谷
191	永井　正友		↓77
199	高田　有雪		大矢 有雪 点1 大坂
200	鑰田　近雪		大矢　近雪
201	小武家素扇		大矢　素扇
216	内越町友信	蛙付1 大坂 落12 大坂	
219	和田　宜範		花1 宜範 点2 大坂
221	船橋　宗春		大矢　宗春
226	太刀　重次	烏 蛙 落 難草に 大坂重次	歳 物 大矢 山下 矢野 重次
228	木田　正吉	烏7	
229	佐伯　正次	玉海5	
230	同孫小弁女	母弁女は古今女歌五	
243	野河　一知	烏1 大坂 薩摩屋	生　一知
245	中村　元也		花2
250	吉田　庭柳		点1　大坂
256	高岡　正由	蛙1尼崎	
270	紙谷　如扶		大矢　百54　三序
272	志水　藤女		点1　女歌十
273	井筒　正好	落2　大坂	難千に伴・丸氏
281	下町　一友		生 歳 物・二 岡野 水男 伊丹
282	嶋谷　信重	↓327とダブリ	
285	山下　重次	↓226	
286	関　忠重		物1　備前
287	半田　正任		生　大塚
290	尼崎　正春	烏1　柏屋	生　井田
292	□井　如水		二1　柳枝軒
293	尼崎　正次	難草1　大坂	生 歳 正次 町田・佐伯・平野
294	野田二郎吉		大海1　大坂住
299	野溝　頼治	蛙4 大坂 難草8 大坂	点8　大坂
308	下町　政寛		二2 大矢 百56 京屋 政寛 京屋
312	下町　友保	難草2 尼崎 衣笠	点3　大坂
321	山崎　問楽		物1　二1
327	嶋谷　信重	↓282	
329	上本町重勝		生祝 大矢2 重勝 重勝
333	平野　正次	↓293尼崎正次	
338	畑　西知		二2　大矢　西知
342	若狭　貞昌		二1　薬袋子
343	林　西千		点1　筑前西千
345	古川　自次		二5 大矢 点4 筑前
348	岩井　不丸		点8

表(7)　「大坂歳旦」で手がかりのない者

45	中原 寿庵	58	岡本 益西	68	下町 弥之	85	辰巳 由親	108	近藤 孟之	124	丁野 伝武	163	岩屋 秋夕	146	竹内 正年	159	大山 市富	170	滝田 正長	179	中西 方重	195	栫 白玉
46	中川 元窓	69	岡 正猶	60	水男 一友	93	鈴木 廬哉	110	田中 一栗	125	土屋 空笑	138	岩屋 夢颯	148	石田 正綱	161	沢本 副長	171	岡本 有三	182	四橋 久年	198	橋波 可清
48	太刀 勝吉	69	斎藤 宗保	71	泉 一祐	96	須田 三白	112	小曽根東鶴	127	一瀬 河風	139	原田 清里	150	宇田 門柳	162	高嶋 岑曝	174	渡辺 瓦石	186	志水 喜□	202	安田 正意
53	長浜 正光	61	林富 定由	74	森本 三木	99	高嶋 如犬	118	下町 正勝	128	水科 如常	140	桜井 不心	151	東 不遠	165	栗岡 玉重	175	田宮 正綱	189	谷市 方草	203	網干 如瓢
54	森田 忠辰	62	不計 長賢	76	半田 善柳	100	志水 貞[illegible]	120	村瀬 松参	129	竹内 永吟	141	中坂 哥友	155	合田 国次	166	同 玉次	176	北村 長久	190	桜井 友親	204	下川 幸政
55	高安	63	竜野 安知	79	水田 元清	101	天王寺貞信	121	本照寺日信	134	梶浦 良太	142	下町 友清	156	泉井 為十	167	日出 仲光	177	谷町 風扇	192	富士山貞行	205	河口 正綱
56	岸田 愛宗	65	下町 伊喜	82	野里 貞継	106	中原 不省	122	釈 春翁	135	森本 重夫	145	岩田 伊清	158	花岡 正船	168	千草 [illegible]長	178	塗師 豊時	193	熱田 嘉昌	206	多田 神也

198	白玉	182	方重	171	正長	161	市富	148	正年	138	秋夕	125	伝武	110	孟之	93	由親	60	弥之	69	益西	46	寿庵
202	可清	186	久年	174	有三	162	副長	150	正綱	139	夢颯	127	空笑	112	一栗	96	三白	71	一友	69	正猶	48	元窓
203	正意	189	喜□	175	瓦石	165	岑曝	151	門柳	140	清里	128	常	118	正勝	99	如犬	74	一祐	61	宗保	53	勝吉
204	如瓢	190	方草	176	正綱	166	玉重	155	不遠	141	不心	129	永吟	120	松参	100	如犬	76	三木	62	定由	54	正光
205	幸政	192	友親	177	長久	167	玉次	156	国次	142	哥友	134	良太	121	重夫	101	貞[illegible]	79	善柳	63	長賢	55	忠辰
206	正綱	193	貞行	178	風扇	168	仲光	158	為十	145	友清	135	良太	122	春翁	106	不省	82	貞継	65	伊喜	56	愛宗

276	江川 久勝	262	小林 重吉	254	森川 一雪	246	木村 一□	237	飯嶋 車風	227	亀谷 元珍	217	内越町正近	207	日野 重継	195	栫 白玉	179	中西 方重	170	滝田 正長	159	大山 市富
277	小野 改英	263	田中 政房	255	高山 信貴	247	□風	838	上坂 知友	231	沙門 愚念	218	津田 転元	208	釈 寿慶	198	橋波 可清	182	四橋 久年	171	岡本 有三	161	沢本 副長
278	木村 家次	264	今喜田政辰	257	長谷川久貞	248	田中 一采	239	土屋 独詠	232	[illegible]物 宣架	220	今井 清久	209	三田 乗船	202	安田 正意	186	志水 喜□	174	渡辺 瓦石	162	高嶋 岑曝
279	下町 重延	267	西尾 少心	258	中村 知水	249	住吉 松柳	240	縣 元昭	233	榊 基則	222	伏見 梅水	212	桑津 知行	203	網干 如瓢	189	谷市 方草	175	田宮 正綱	165	栗岡 玉重
280	下町 良房	271	近江 柳上	259	浅山 可□	251	扇子 岸柳	241	松園 元祐	234	北村 丸[illegible]	223	福嶋 良永	213	池見 鹿子	204	下川 幸政	190	桜井 友親	176	北村 長久	166	同 玉次
283	京 光寛	274	岡 一由	260	津山 未定	252	沢村 梅柳	242	下町 忠縄	235	藪田 重春	224	松井 糸一	214	山下 一風	205	河口 正綱	192	富士山貞行	177	谷町 風扇	167	日出 仲光
284	下町 宗好	275	生玉 鏡応	261	庄司 重一	253	赤井 風流	244	井上 銀勝	236	下町 寸詠	225	谷町 松隣	215	内越町季繁	206	多田 神也	193	熱田 嘉昌	178	塗師 豊時	168	千草 [illegible]長

288	尼崎 永氏	300	浜田 重光	307	下町 笘甚
289	松井 洒水	301	宮田 竜慶	309	宮田 元常
291	尼崎 任誓	302	下町 雲梯	310	来田 伸俊
295	柏 正信	303	下町 清友	311	下町 笑酔
296	明石 永重	304	泉 清佐	314	中嶋 吉昌
297	土室 一団	305	松浪 黙斎	315	下町 宗巳
298	太田必改子	306	宮田 利忠	316	下町 □木
317	笘 荷葉	318	下町 山頭	319	下町 [金]重
320	□□ 住扇	322	榊原 イ志	323	江戸 イ吟
324	潤扉軒イ伺	325	本町 独枕	326	下町 宗氏
328	市振 元房	330	奈良 一甫	331	松井 高明
332	友田 吉次	334	備後町勝平	335	備後町元長
337	袴 不竹	341	木草・喜槌	347	釈 白天

既出の者

41	松坂 一飛	生	42	広橋 三久	独
47	筒井 道竹	生	84	松岡 宗保	独
86	平野 末成	独・物・二	87	鷲 本秋	生・二
91	水野 一永	生・独	92	白石 酔白	生・物
94	木村 政仍	生	97	日野 一枝	独
98	井手 元之	独	102	岩田 峯雪	生・独
103	萩原 正俊	生・独	104	人見 口和	独
105	箕輪 存景	独	113	植村 正勝	生
115	須藤 佐重	独	116	玖生 且保	生
173	三宅 独友	独	180	生玉 宗本	独
181	関岡 破瓶	独	183	村上 儀一	独
194	阿乃 寸志	生	196	池田 一竹	生
197	重村 忠友	生	210	山下 一志	生・独
211	玉造 光友	生	265	吉本 立川	生・物・二
266	山田 秀信	独	268	平井 [雍]悦	独
269	四条 得直	生・大矢	313	泉 和善	生
336	平野 治平	生	339	横地 夢遊	独・二
340	水野 「栄甫	生・古今・独	344	佃田 正猛	生
346	森 種成	独・二	349	和気 遠舟	生等
350	天王寺道寸	哥等			

（310名中39名）

る。確かに、表示した（表(3)）の西鶴編著は宗因の峻拒がない限り載せられるわけだが、延宝八年五月興行の『大矢数』に巻頭第三を送っていることなどから、故意に与えない程関係が悪化していたとは思われない。この時点での宗因と西鶴の関係は暫く保留しておく。

次に引付四十位以下である。表(6)に引付四十一位以下三一〇人のうち、疑わしい者まで含めて可能性ある者を示し（重

出者等も含む）煩わしくなるが表(7)には手がかりのない者を、その後に既出者を示した。既出者から記すと三一〇名中三十九名。これに上位四十位中の三十一名を加えると七十名。三物で八名を数えるから（衣笠一鶴は含まず）、『大坂歳旦』に出る中の既出者は七十八名ということになる（187の吉重等若干加わるかもしれない）。

何らかの手がかりありそうなのが九十名弱。そのうち『百人一句』に名を連ねるのが古川定圃（83番）、深江乗竹（119）、斎藤賀子（152）、下町政寛（308、京屋政寛と見てよいだろう）の四名。賀子の登場が注目される。他は、『古今誹諧師手鑑』に入る摂津池田の佐伯弁女の父、正次（229、「玉海」に5句入集）、同孫小弁女（230）、『三ヶ津』の序者紙谷如扶（270）、『女歌仙』に入る初女（153）、同じく志水藤女（272）、筑前の古川自次（345）等が目立つ程度である。しかし、この中の高野幸則（95）が、先に掲げた「柴屋寺奉納発句」六十五番に見える大坂住の高野伊右衛門幸則（同発句には惟中・以仙・如見、『生玉』執筆等で知られる伊藤道清が入る）と同一人である可能性が強いなど、まだ問題は残っている。また、大鶴、鶴爪、鶴信の他、小曽根東鶴（112→表(7)）、市川西三（163）、畑西知（338）、林西干（343）と、「鶴」「西」の付く者も出てくる。上記のうち、西三は『大矢数』の西三、西知は『一葉』（畑西知）、『大矢数』の西知、西干は『点滴』に出る「筑前／西干」と同一人だろう。東鶴は管見の範囲他に見出さないが、思い出されるのは明和七年（一七七〇）の『絵本舞台扇』の自序に「摂陽西鶴孫東鶴」と署名した者のいることである（野間光辰氏『補刪西鶴年譜考證』）。この東鶴は松村氏、赤松堂と号し、祇空門の俳人の由で、野間氏が西鶴孫の可能性なくはないとされる人物である。もとよりこの東鶴とは関係ないのだが、同じ名が出たので付言した。

おわりに

表(6)(7)はまだ調査が行届かなかったり判別不能の者（226重次、293正次、281一友等）があったりしてきわめて不充分なも

ので、御教示を得たいが、しかし、西鶴の『大坂歳旦』にかけた意気込みのすごさは感得できるだろう。現段階で言えば、確かに無名の素人に近い者で過半は占められていると思われ、例えば「下町一笑」(43)の如く「下町」を冠する者だけで二十三名(他に65・68・118・142・149・236・242・279・280・281・284・302・303・307・308・311・312・315・316・318・319・326。しかもこの中には、『太夫桜』『点滴集』等に顔を出す「下町百切」は出ていない)、その他内越町季範(215)、同正近(217)、谷町風扇(177)、同松隣(225)、備後町勝平(334)、同元長(335)等、ともかく西鶴が大動員をかけたという印象は拭いきれないのである。しかし、そういう泡沫が多かったとしても、上位四十名は、師宗因を欠くとはいえ、見てきた如く大阪俳壇の知名者を殆ど網羅していた。数への志向が西鶴の真骨頂であるとすれば本歳旦帳もまたその一典型であろうし、そういう中から新しいものを獲得していくのが西鶴の特徴であるすとれば、上記大物を揃え得たということで、この歳旦帳の成就も、頗る大きな自信を与えたのではなかろうか。ここで西鶴は、大阪に確たる地位を築いたと確信したのである。

それかあらぬか、西鶴は同じ延宝四年十月には総二四六名に及ぶ『古今誹諧師手鑑』を編集して眼を全国に向け、『物種集』(延宝六年刊)『二葉集』(同七年刊)でも各地に目を注ぐ。山口信章・松尾桃青・谷木因・中村西国・釈西波等が新しく視界に入ってき、いわば本歳旦帳に出る無名の近辺者を切り捨てる形で新しい人脈が形成され、それがやがて壮大な『大矢数』に繋っていくのである。『物種』『二葉』また、一つの転機であった。俳諧師本来の連衆との交歓も、むろんこれ以前にもあるにはあるのだが、延宝四年頃から一段と賑やかになっていく。本稿ではそこにまで目が及ばなかったが、次稿ではできるかぎりそれにも目を配りつつ、『物種』『二葉』を中心に、『大矢数』に到るまでの展開を追尋してみたい。筆者がいま興味を持っているのは、『生玉万句』で実質的に出発する俳諧師西鶴が、どのようにして自己の周辺に人を集め、どういう俳人と長く接触を保ちどの俳人を切り捨てているか、またどんな形で新しい血を移入しているか、ということである。その意味では、同時期の大阪俳人のうち、遂に彼と交差することのなかった者のいることも、問題とな

るであろう。

（昭和60年1月18日）

注(1) 先稿では『生玉万句』前後を併せて処理している。

注(2) このことに関しては、平野・泉州の人多いのを宗因の力とされる飯田正一氏の「土橋宗静」（「関西大学文学論集」九巻三号、昭和34・6）の論あるをあとで知った。

注(3) 『玉生万句』の興行については、野間光辰氏が追加三句の後の「寛文十三癸丑林鐘廿八日」から六月の興行（『西鶴年譜考證』）とされたのに対し板坂元氏が追加の発句が春だから春の興行ではなかったかと疑義を出され（「野間光辰氏著『西鶴年譜考證』」、「国語と国文学」昭和27・10）、野間氏もそれに賛意を示されているのだが（『補訂西鶴年譜考證』）、前田金五郎氏が、後述「土橋宗静日記」の寛文十三年二月十四日の記事（西鶴を排除したと考えられる万句興行に触れる）から、『生玉』の春興行は無理で、六月と考えるべきだとの見解を出されている。

注(4) 『西鶴論叢』（中央公論社　昭和50・9）所収「『大坂歌仙』の初撰本をめぐって」。全容の紹介と考察がある。

注(5) 種茂　勉氏「大坂壇林俳壇の研究」㈢。

注(6) 塩村耕氏「鯛屋一族の文芸活動」（昭和59年11月日本近世文学会秋季大会研究発表）。

注(7) 平野郷公益会編、昭和六年六月初版、昭和四十五年八月清文堂複刻。

注(8) 岸得蔵氏「柴屋寺奉納発句」（静岡女子短期大学国文研究室編資料翻刻第五集、昭和40・5、成文堂刊『仮名草子と西鶴』〈昭和49・6〉にも収録）に拠る。

注(9) 天理図書館善本叢書第三期（39）『談林俳諧集』解説（八木書店　昭和51・3）。

注(10) 和気遠舟編の『太夫桜』は延宝八年三月の遠舟序を持つが、巻末の「藤発句」は同四年遠舟宅にて催された藤万句興行の際のものである旨の前書があり、とすれば「藤発句」は『大坂歳旦』と時間的に近接することになる。

注(11) 頴原退蔵氏「西山宗因」（頴原退蔵著作集第五巻〈中央公論社昭和55・7〉による）。

注(12) 板坂元氏「西山宗因研究―延宝三年の東下をめぐって―」（「国語と国文学」昭和28・3）、島居清氏「西鶴と宗因」（「解釈と鑑賞」昭和32・6）。